

収 録 作 品 紹 介

略伝

三十代から六十代まで、新聞や雑誌の求めに応じて発表した短い自伝を収めました。三重県とは無関係な記述も含めて全文を取録しましたから、乱歩がどういう人だったのか、簡単に知ることができます。

江戸川乱歩略歴 ■ 一頁自伝 ■ 豆自伝 ■ 私の履歴書

家族

名張で誕生した当時の様子と、両親、祖母の横顔を伝える随筆です。「祖母に聞かされた怪談」で回顧されているのは名古屋時代のエピソードですが、家族の面影をとどめるよすがとして採りました。

父母のこと ■ 七十年前の父の写真 ■ 涙香の愛読者 ■ 母を語る ■ 祖母に聞かされた怪談

家系

平井家について書かれた文章です。乱歩の自伝としては昭和三十六年（一九六一）刊行の『探偵小説四十年』が知られていますが、「彼」は未完に終わったもうひとつの自伝。祖先の記録と亀山での記憶を扱った冒頭の二章を抜粋しました。三章以降は名古屋での思い出になるため省きましたが、巻末に掲げた底本で全文をお読みいただければと思います。「祖先発見記」では平井家と藤堂家の意外なゆかりが紹介されます。

彼 ■ こわいもの ■ 祖先発見記 ■ 上総介藤原兼重

少年時代追懐

名古屋から津へ遊びに行った子供のころの思い出が回想されています。「筆だこ」は津

の青年たちが発行していた同人誌に寄稿された随筆です。

筆だこ ■ 故郷に夏ありき

職業を転々す

乱歩が名古屋の旧制中学を卒業した直後、父親が事業に失敗して平井家は破産しました。乱歩は苦学して大学に通い、アルバイト先で生涯の恩人と慕うことになる伊賀出身の先輩に出会います。大学卒業後は職業も住居も定まりません。

自治新聞ノ編集手伝イ ■ 大阪 加藤洋行店員 ■ 考えふける時を求めて ■ 若気のあやまち ■ 僕の職業変遷史

暖国の気ままな勤め

一年あまり鳥羽で造船所に勤務し、おとぎ話の会をつくって町内を回ったり、雑誌を編集して気を吐いたりしましたが、気ままな会社員生活は長くはつづかず、乱歩は鳥羽をあとに上京します。昭和十六年（一九四一）に作成されたスクラップブック『貼雑年譜』には当時の心境が克明に明かされています。

鈴木商店鳥羽造船所社員 ■ 哀愁の秋 ■ 鳥羽おとぎ倶楽部 ■ 雑誌「日和」編集 ■ 首途 ■ 音楽会 ■ 日和余誌 ■ 彫雑より統一 ■ 学問ノ夢 ■ 長野幹氏談 ■ 尾崎為次郎氏談 ■ 参与官と労働代表 ■ 最も印象に残った人 ■ 大正十五年（昭和元年）度 ■ 幻影の城主 ■ 解説 ■ あとがき ■ 忘れ得られぬ美しい鳥羽の印象 ■ 中将姫

妻

東京で弟二人と古本屋を営んでいたとき、鳥羽で親しくなった女性が病に伏していると知り、乱歩は結婚を決意します。挙式は大正

八年（一九一九）。「恋病」は結婚後、三重県の新聞に六回にわたって連載された恋愛論ですが、結婚に至るいきさつが記された回を抜粋しました。

村山隆ト結婚ス ■ 東京市社会局吏員 ■ 恋病 ■ 妻のこと ■ 私の結婚 ■ 女房とわたし

探偵作家の日々

大阪に住んでいた大正十二年（一九二三）、乱歩は探偵作家としてデビューし、東京に転居して人気作家の道を歩みます。短篇「算盤が恋を語る話」「屋根裏の散歩者」や長篇「パノラマ島奇談」「孤島の鬼」には、鳥羽での思い出が懐かしげにちりばめられています。東京でも鳥羽で知り合った友人との交友はつづきました。

井上勝喜宛書簡 ■ 大正十四年度 ■ 樂屋嘶 ■ 父の死 ■ 岩田準一君の挿絵 ■ 岩田準一 ■ 昭和三年度 ■ 精神分析研究会 ■ 衆道歌仙 ■ 同性愛文学史 ■ 岩田準一君の思い出 ■ 家族を疎開させる ■ 関西行脚

ふるさとの発見

乱歩は晩年になって生まれ故郷の名張を訪問、初めて生家跡に立ち、それがきっかけとなって江戸川乱歩生誕地碑が建立されました。死去はその十年後、昭和四十年（一九六五）のことでした。

追放解除と川崎克先生 ■ 序 ■ 後岩つゝじ ■ ふるさと発見記 ■ 三重風土記 ■ 名張・津・鳥羽 ■ 津 ■ 雑煮お国自慢 ■ 生誕碑除幕式 ■ 二銭銅貨 ■ 先生に謝す ■ 海草美味 ■ ふるさとの記 ■ 白鳳城 ■ 古城にうたう ■ 名張 ■ なつかしい坂手島 ■ ふるさとへの年賀状 ■ 赤目四十八滝 ■ カラーお国めぐり ■ 牛は松阪 ■ 味の散歩道

〔タイトルの下の*は抄録を示します〕

この本には三重県内のこんな地名が登場します

